

岡山芸術交流2019

Okayama Art Summit 2019

詳 細 企 画

令和元年 5 月 27 日
岡山芸術交流実行委員会

目次

1	開催趣旨.....	2
	(1) 趣旨.....	2
	(2) コンセプト.....	3
	(3) 重点取り組み.....	3
2	開催概要.....	5
	(1) タイトル.....	5
	(2) 会期.....	5
	(3) 会場.....	5
	(4) 方向性.....	8
	(5) 参加アーティスト(5月27日現在).....	9
3	鑑賞券.....	22
4	情報発信.....	23

1 開催趣旨

(1) 趣旨

岡山市は、温暖な気候や交通の利便性などから、近年は大都市圏からの移住先として人気が高まっています。一方で、都市の魅力の発信という点では、こうした環境面でのポテンシャルの高さを活かしきれていないという指摘がたびたびなされています。

さらに岡山市中心市街地においては、様々な施設の整備・開発が進んでいる岡山駅周辺エリアに対し、旧城下町エリアの賑わいの核としての地位が相対的に低下しており、その解決のため、中心市街地の回遊性向上や街の魅力向上が急務の課題となっています。

旧城下町エリアは、戦国末期の岡山開府以来 400 有余年の歴史を誇る岡山のルーツともいべきエリアです。そこで培われてきた文化が岡山らしさを、岡山の魅力を生み出してきたことを考えると、このエリアの賑わい復活は、中心市街地活性化に止まらない、「岡山の顔」の再生に他ならないと考えます。

そこで、私たちが着目したのが、「芸術文化のもつ創造性」です。

2016 年 10 月 9 日から 11 月 27 日までの 44 日間、岡山城・後樂園周辺ゾーン内において、徒歩圏内の歴史・文化資源を活用した会場に最先端のコンセプチュアルアートを集結したコンパクトな展示をコンセプトとし、「開発 | Development」をテーマとした国際現代アート展「岡山芸術交流 2016」を開催しました。

会期中、延べ 23 万 4 千人が来場し、展示作品群への明確なコンセプトや、他の芸術祭とは一線を画す姿勢、「小旅行気分」「歩いて回れる手軽さ」、展示会場となった近代建築物、オリエント美術館における館藏品とのコラボレーション展示や大型屋外展示など来場者や専門家からも高く評価されました。

「岡山芸術交流 2016」を通じ、わたしたちはアートに秘められた国境・地域・性別・世代の違いを超えて人と人、街と人をつなぐ無色透明の接着剤としての力を強く感じました。アートを通じて、国内外から岡山の街に様々な人々が集い、交わり、絆を深めあう。アートが人々の想像力を刺激し、新たな未来を創り出そうとする力をはぐくんでいく。そして人と人、街と人との新たな出会い、思いがけない組み合わせが生み出す化学反応は、新しい価値の創造のみならず、私たちの街・岡山のよさの再認識にもつながっていく。アートの力が岡山の新たな未来、新たな魅力を創り出していく原動力になると確信しています。

また、2018年7月に発生した西日本豪雨災害により、岡山市をはじめ、岡山県は甚大な被害を受け、国内外の観光客数も災害前に比べ減少傾向にあります。この「岡山芸術交流2019」の開催が、世界中の目を岡山へ向けさせ岡山来訪の機運を生み出し、観光客数の回復、さらなる賑わいの創出、ひいては復興の一助に寄与するものと期待しています。

(2) コンセプト

○ 歩いて楽しむ

岡山城・後楽園周辺ゾーン内において、徒歩での回遊が可能な圏内に会場を複数配置したコンパクトな開催とする。

○ 資源を活かす

岡山城・後楽園・美術館・文化施設等、ゾーン内に立地する様々な歴史文化資源の特性を活かした展示を展開し、美術鑑賞と観光の融合を目指す。

○ 世界を見る

アーティストディレクターが示す方向性に基づき、岡山で世界からも注目を集める最先端のコンセプチュアルアート作品を集結させた展覧会を目指す。

○ 人を育む

開催を支える人材、特に将来の地域文化の一翼を担う若手人材の育成を推進する。

(3) 重点取り組み

① 地域への浸透

市民・県民、産業界、教育機関、文化団体など様々な主体の参画を促し、地域への一層の浸透を図る。

② 学校鑑賞の強化

前回開催において好評であった県内小学校・中学校の校外学習による鑑賞の支援を強化する。併せて高等学校や創造系の専門学校、大学への鑑賞の働き掛けも積極的に行う。

③ 運営を支える人材の育成

「岡山芸術交流」の運営を支える人材の育成を強化する。特に地元企業に加え、市民・県民、学生の参加を増やすとともに、芸術交流運営に係る内容のほか、独自イベントの実施、まちづくり・観光など幅広い分野の研修を行うなど活動内容の充実を図る。

④ 海外への発信

国内外、特に海外への発信を強化し、世界的な現代アート国際展としての「岡山芸術交流」の評価の確立・浸透に努めるとともに、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催による日本への注目度の高まりも見据えて、開催地・岡山の魅力発信も併せて展開し、海外からの誘客に結び付ける。

岡山芸術交流
Okayama Art Summit



2 開催概要

(1) タイトル

IF THE SNAKE もし蛇が

(2) 会期

2019年9月27日（金）～ 同11月24日（日） 開館日は計51日間。

月曜は休館とする。ただし、祝日・休日の場合（10月14日、11月4日）は、その翌日火曜日を休館とする。

(3) 会場

岡山城・岡山後楽園周辺の歴史・文化ゾーン内において徒歩で移動が可能なコンパクトなエリアに会場を配置する。会場は、旧内山下小学校、岡山県天神山文化プラザ、岡山市立オリエント美術館、岡山城、林原美術館など。その他、屋外でも作品を展示する。

現代アート作品展示会場



旧内山下小学校



岡山県天神山文化プラザ



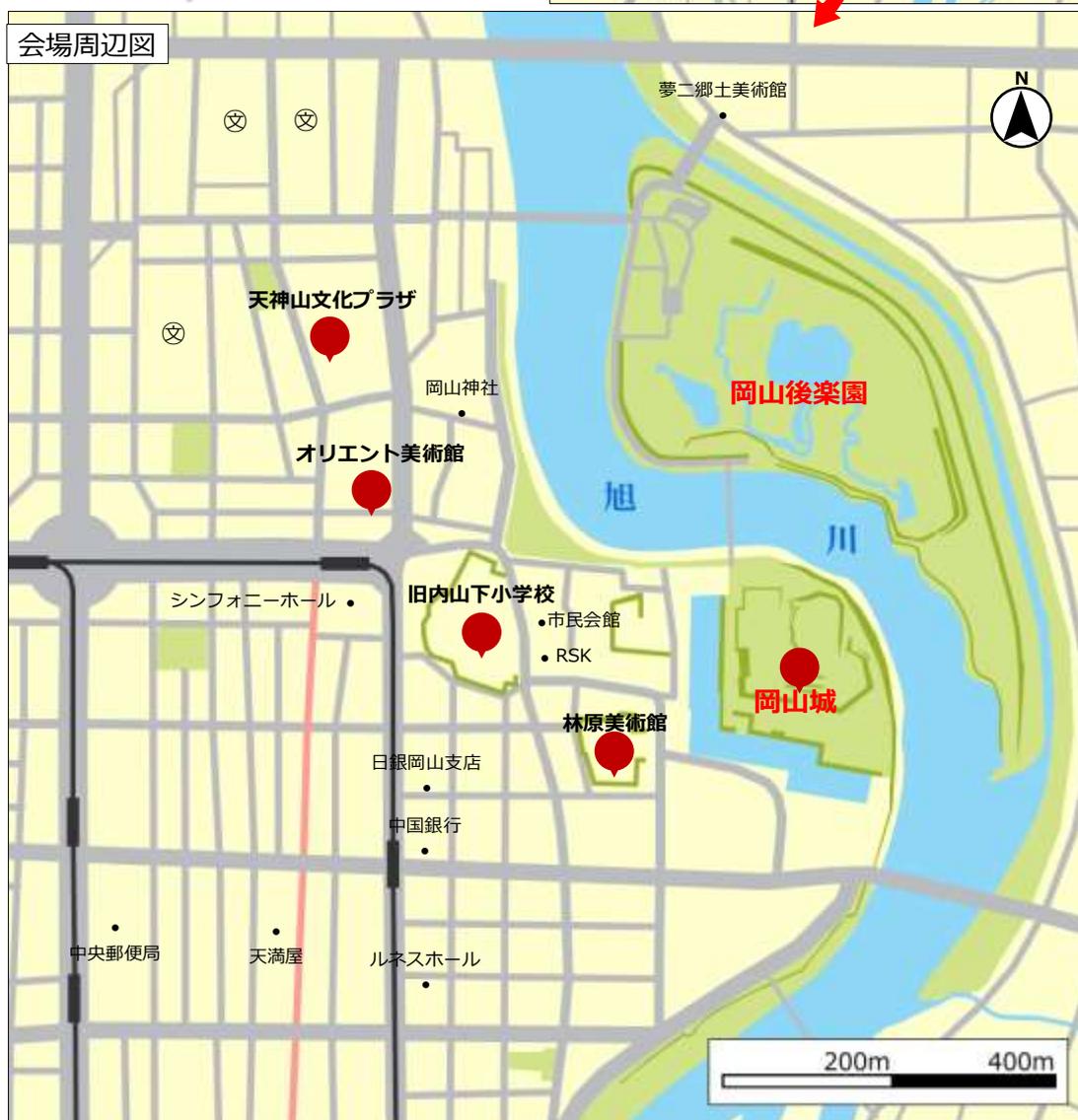
岡山市立オリエント美術館



岡山城



林原美術館



主催

岡山芸術交流実行委員会

会 長 大森雅夫 (岡山市長)

総合プロデューサー 石川康晴 (公益財団法人石川文化振興財団理事長)

総合ディレクター 那須太郎 (TARO NASU 代表/ギャラリスト)

アーティストックディレクター ピエール・ユイグ (アーティスト)

パブリックプログラムディレクター 木ノ下智恵子 (大阪大学共創機構社会学共創本部 (兼 21 世紀機徳堂) 准教授)

[アーティストックディレクター]

ピエール・ユイグ Pierre Huyghe

[略歴]

1962 年、フランス、パリ生まれ。現在はニューヨークを拠点に制作活動中。

ピエール・ユイグの作品は広範囲にわたる生存形態や、無生物、科学技術によって特徴づけられた複雑なシステムとしてしばしばその姿をあらわす。ユイグの構築した有機的組織体は、生物学的要素と科学技術的要素、そして架空の要素を結合させるだけではなく、(仮想現実)没入型の、常に変化し続ける環境を作り出す。その環境のなかで、ヒトや動物、非存在もまた学習し、進化し、成長する。

2001 年に参加した第 49 回ヴェニス・ビエンナーレ (イタリア) にて審査員賞受賞、同年は第 1 回横浜トリエンナーレ (日本) にも参加。2002 年ヒューゴ・ボス賞受賞。2012 年第 13 回ドクメンタ (ドイツ)、2014 年第 10 回光州ビエンナーレ (韓国)、2017 年第 5 回ミュンスター彫刻プロジェクト (ドイツ) など数々の大規模国際展覧会に参加。2013 年にポンピドゥ・センター (フランス) を皮切りに国際的に巡回した回顧展や、2015 年のメトロポリタン美術館 (アメリカ合衆国) のルーフガーデン・コミッション、2019 年サーペンタイン・ギャラリー (イギリス) にて個展を開催など世界各地の著名美術館での個展多数。



Photo credit: Ola Rindal

(4) 方向性

自己発生的な超個体（スーパーオーガニズム）は暫定的設定のもと、一種の思惑に庇護されながら永続的に学習と成長を続けていく。

その超個体は他者への関心をもたない予測不可能な存在として、絶えまなく自らを改造しながら、生物と人工生命体による認知及び行動のさまざまな領域から出現する。

A self-generating superorganism is learning and growing permanently in a conditional set up, under a speculative umbrella.

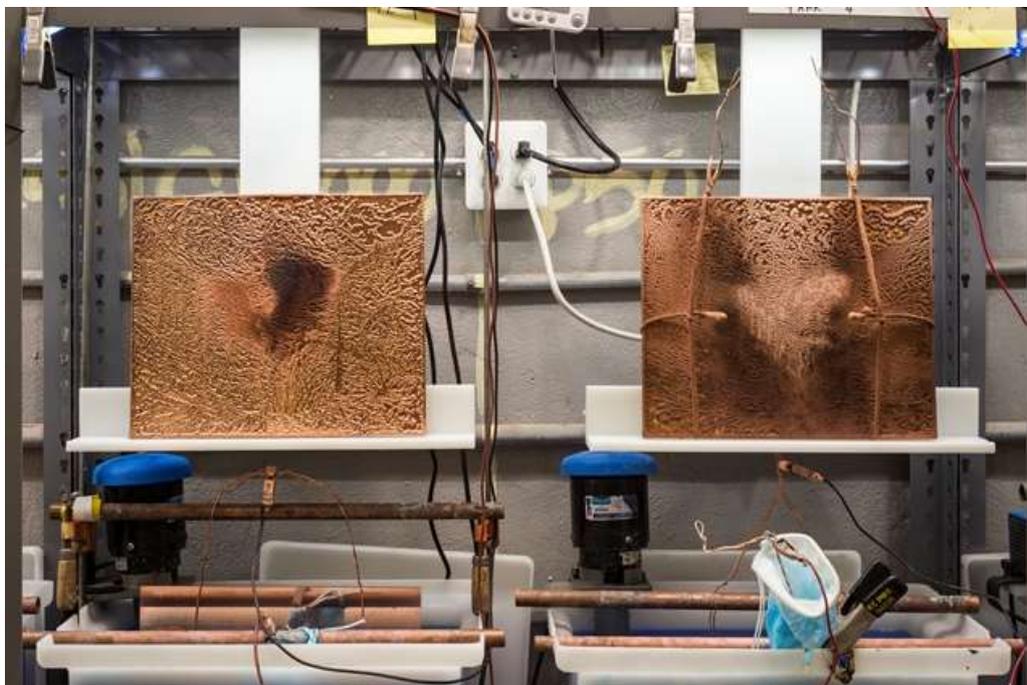
Indifferent and unpredictable, it emerges from different realm of cognition and behaviors of biotic and artificial life forms, constantly modifying itself.

(5) 参加アーティスト (5月27日現在)

マシュー・バーニー Matthew Barney

1967年、サンフランシスコ生まれ、アイダホ州ボイシ育ち。イエール大学に入学し、1989年に学位を取得。以後現在に至るまでニューヨーク在住。

マシュー・バーニーは最初期の作品から、映像、彫刻、写真やドローイングを取り入れたマルチメディア芸術の実践を通じて、身体的限界の超越を探究し続けてきた。代表作として2014年の「River of Fundament」、オペラ映画三部作「The CREMASTER Cycle, a five-part project made from 1994-2002」、現在も進行中のプロジェクトとして「DRAWING RESTAURANT」が挙げられる。ソロモン・R・グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）、サンフランシスコ近代美術館（サンフランシスコ）、金沢21世紀美術館（金沢）、ハウス・デア・クンスト（ミュンヘン）など世界各地の美術館にて個展開催。最新作である「Redoubt」は2016年から3年間かけて制作された長編映画作品であり、2019年UCCA（北京）、2020年Hayward Gallery（ロンドン）にて上映予定。



Bayhorse: State four and Bayhorse: State five in
electroplating room
2018
Photo : Paul Kennedy

エティエンヌ・シャンボー

Etienne Chabaud

1980年 フランス、ミュルーズ生まれ。

現在はパリ、ミラノにて制作活動中。

シャンボーはコラージュ、写真、ネオン、絵画、映像などの手法を用いながら、形態・物体・論説の境界線を探求してきた。近年では「世界地図を書き換える」という目的のため筏を大西洋に漂わせる、幾何学的な数字と動物園の猿との遭遇を企画する、など様々な「状況」を作品化する試みを行う。また「自然」という近代の概念形成や、非自然の生態環境と「人間」「人間以外」「非人間なもの」というカテゴリーの関係を分析する、実験的なドキュメンタリー "The Untamed Night" の制作にも継続的に取り組んでいる。

主な個展として 2017年「The Untamed Night」EMPAC, Troy（ニューヨーク）、2016年「Incomply」Labor（メキシコシティ）、2011年「The Encored Separation」アートアンリミテッド（バーゼル）など。また近年参加した主なグループ展としては 2016年バルセロナ現代美術館「collection 31」、パラサイト（香港）、2014年「Une Histoire」ポンピドゥーセンター（パリ）など多数。



Negative Knots, 2018
Courtesy of the artist

ポール・チャン
Paul Chan

1973年 香港生まれ。

ポール・チャンは美術家、文筆家、出版者として活動。ニューヨーク在住。アニメーションやドキュメンタリービデオ、立体、インスタレーションからフォントのデザインまで、多様な形態の作品を発表してきた。2014年には、2年に一度、現代美術に目覚ましい貢献をした作家に贈られる、ヒューゴ・ボス賞を受賞。その作品は世界各国で展示されており、近年の主な個展として2018年ゲッティ美術館（ロサンゼルス）、キクデラス美術館（アテネ）、2017年ペンシルベニア美術アカデミー（ペンシルベニア）、2011年-2012年「Before The Law」ルートヴィヒ美術館（ケルン）、2007年-2008年「ザ・セブン・ライツ」サーペンタイン・ギャラリー（ロンドン）；ニュー・ミュージアム（ニューヨーク）などがある。2012年ドクメンタ（カッセル）、2009年第53回ヴェニス・ビエンナーレ（ヴェネツィア）、2008年横浜トリエンナーレ、2007年イスタンブールビエンナーレ（イスタンブール）、2006年ホイットニービエンナーレ（ホイットニー美術館、ニューヨーク）など、各国の国際展に参加。またチャンの評論はArtForum、Frieze、Flash Art、October、Tate、Parkettを始め多数の雑誌に掲載されている。2010年には出版社「Badlands Unlimited」をニューヨークにて設立。



Le Baigneur 1,
2016
Courtesy of the artist and Greene Naftali, New York
Photo: Elisabeth Bernstein

イアン・チェン

Ian Cheng

1984年、ロサンゼルス生まれ。現在はニューヨークを拠点に活動。

モーションキャプチャーなど最先端のアニメ技術を使い、人工的に作られた事物が異種混合的に絡み合う映像作品を制作している。

近年の個展として、2018年サーペンタイン・ギャラリー（ロンドン）、2017年Moma PS1、2015年サンドレット・レ・レバウデンゴ財団現代美術館（トリノ）、デュッセルドルフ美術館（デュッセルドルフ）、2014年ミラノトリエンナーレ（ミラノ）などがある。主なグループ展として2017年横浜トリエンナーレ、2016年リバプール・ビエンナーレ、2015年パリ市立近代美術館（パリ）、オルブライト＝ノックス美術館（アメリカ合衆国）、2014年台北ビエンナーレ（台北）、2013年リヨンビエンナーレ（リヨン）、Moma PS1（ニューヨーク）、2012年スカulptチャーセンター（ニューヨーク）など多数。



Bag Of Beliefs (BOB), 2018
Serpentine Gallery, London
Photo : Andrea Rossetti

メリッサ・ダビン&アーロン・ダヴィッドソン

Melissa Dubbin & Aaron S. Davidson

メリッサ・ダビン 1976年 アメリカ、ニューメキシコ州 生まれ

アーロン・ダヴィッドソン 1971年 アメリカ、ウィスコンシン州

現在はブルックリンにて制作活動中。ダビン&ダヴィッドソンは1998年よりアーティスト・ユニットとして活動中。写真、ビデオ、サウンド、パフォーマンス、彫刻、書籍といったメディアムを用いての作品群を発表する彼らは、伝達と受信／干渉と移転のプロセスについて言及しながら、しばしば音、光、空気、時間といった無形または短命な物質のありさまを実体化しようと試みてきた。2016年には世界的に有名なピノー・コレクションが運営するアーティスト・イン・レジデンスに参加。近年の主な個展に2017年「Bitter Sweet Symphony」untilthen (パリ)、「Poétique des sciences」Fresnoy (トゥールコワン、フランス)、2016年「Nobody Shoots a Broken Horn in Early Spring」Campoli Presti (パリ)、2013年 Audio Visual Arts (AVA) (ニューヨーク) など。また Beirut Art Center (ベイルート)、Sculpture Center (ロングアイランドシティ、ニューヨーク)、Overgaden (コペンハーゲン)、New Museum (ニューヨーク)、光州ビエンナーレ (光州、韓国) など各国の美術館やギャラリー、芸術祭での展示機会多数。



Core (1), 2017
Courtesy of the artists

ジョン・ジェラード

John Gerrard

1974 年、アイルランド生まれ。現在はダブリン（アイルランド）、ウィーン（オーストリア）を拠点に活動。

ジョン・ジェラードはデジタルメディア発展に貢献してきた作家の一人。一見するとフィルムまたはビデオ作品のようであるが、ジェラードの作品は軍用に開発され現在はゲーム産業で用いられている「リアルタイムコンピュータ・グラフィックス」を用いたシミュレーション、すなわち仮想世界である。グレートプレーンズやゴビ砂漠、ジブチの軍事訓練所など、地理的に孤立した場所をしばしば探検し、過去数世紀に渡って人類とともに発展してきた権力機構や、エネルギーのネットワークに言及する作品を発表している。テート（ロンドン）、ニューヨーク近代美術館（ニューヨーク）、サンフランシスコ近代美術館（サンフランシスコ）、ロサンゼルス・カウンティ美術館（ロサンゼルス）、ハーシュホーン博物館（ワシントン）、キステフォス博物館（ノルウェー）、アイルランド現代美術館（ダブリン）、ボルサンコレクション（イスタンブール）など世界各国の著名美術館に所蔵されている。近年手がけた屋外展示プロジェクトとして、2017 年サマーセット（ロンドン）での LED パネル展示や、2018 年のロサンゼルス・カウンティ美術館、2019 年パーム・スプリングスでの「Desert X」プロジェクトなどがある。



X. laevis (Spacelab), 2017
Courtesy of the artist, Thomas Dane Gallery, London and Simon
Preston Gallery, New York

ファビアン・ジロー&ラファエル・シボーニ
Fabien Giraud & Raphaël Siboni

ファビアン・ジロー（1980年生まれ）とラファエル・シボーニ（1981年生まれ）により結成。2007年よりパリを拠点に活動。

ドキュメンタリー、映画史、哲学、技術史を引用した作品制作を行う。

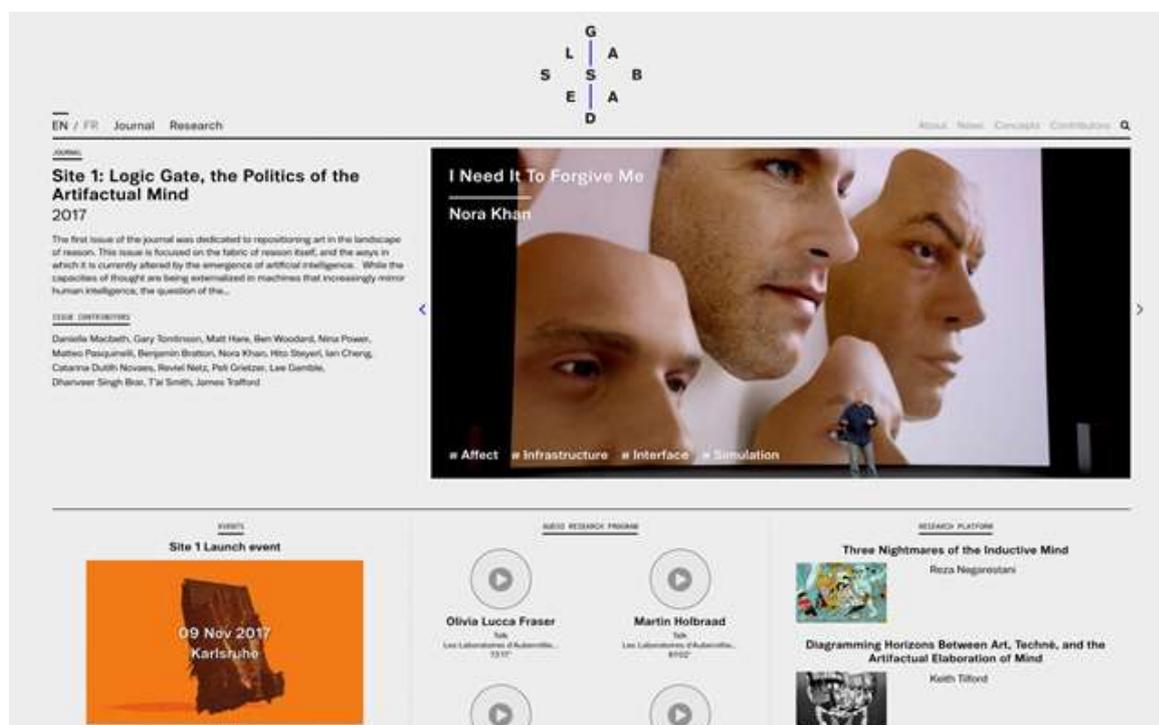
近年の個展として、2009年ガートルート・コンテンポラリーアートスペース（メルボルン）、2007年にパレ・ド・トーキョー（パリ）などがある。近年参加した主なグループ展として、2017年リバプールのビエンナーレ、2015年パラッツォ・リーゾ美術館（イタリア）、2011年コペンハーゲン国際ドキュメンタリー映画祭（コペンハーゲン）、2009年モスクワビエンナーレ（モスクワ）など多数。



1922 – The Uncomputable The Unmanned
Season 1, Episode 4, 2016
© Fabien Giraud & Raphaël Siboni

グラスビード Glass Bead

芸術、科学、哲学といった複数の学術的、実践的、政治的な交差を考えるリサーチ・プラットフォーム。アーティスト、歴史家、理論家により構成されている。パリとロンドンを拠点に活動。オンライン上で記事を公開している他、本の出版、レクチャー、ワークショップなどを行う。メンバーにはファビアン・ジローが含まれている。



Glass Bead's website homepage ©Glass Bead

シーン・ラスペット

Sean Raspet

1981年、ワシントンD.C.生まれ。ロサンゼルス在住。

シーン・ラスペットの作品は、しばしば人工風味の液体化学製剤や香りの分子で構成される。とりわけ近年は食物、栄養素、人間の代謝、幹細胞を介した人間の細胞の発達等も作品に取り入れてきた。ラスペット自身が味と香りに関する化学者であり、また藻類を原材料とする食品会社"Nonfood"の設立者でもある。彼の実践はアートに特化した経済構造から距離を置くことを優先している。大量生産品や登録商標の構造といった現在優勢を占める生産方法を作品に利用しながら、経済全体の循環へとつなげている。The Artist's Institute (ニューヨーク)、シカゴ現代美術館 (シカゴ)、デトロイト現代美術館、デ・ヤング美術館 (サンフランシスコ)、木木美術館 (北京)、Société (ベルリン)、The Kitchen (ニューヨーク)、など各国で展覧会を開催。第9回ベルリン・ビエンナーレをはじめとした国際展への参加も多数。



O=C(OCCC(C)C)C, 2014

Image courtesy the artist and Société

リリー・レイノー＝ドゥヴァール

Lili Reynaud-Dewar

1975年、フランス生まれ。ローマ（イタリア）、グルノーブル（フランス）在住。リリー・レイノー＝ドゥヴァールはダンス、文筆、映像、彫刻、ビデオインスタレーション、パフォーマンスなど様々なジャンルで活動。ジュネーブ造形芸術大学教授であるドゥヴァールは、作家単独で、または友人や家族、生徒とともに制作を行っている。2009年、ドロシー・デュピュイ、ヴァレリー・シャルトランと共同で、芸術とエンターテインメントに関するフェミニスト出版社「Petunia」を設立。2015年、文筆作品を集めた「My Epidemic, texts on my work and the work of other artists」をパラグアイ・プレスより発表。同年には自身のスタジオにて、パリ、ジュネーブ、ウィーン等から友人作家を集め一夜限りの展示を行う「Maladie d'Amou」と呼ばれる社会的・感情的な実験プロジェクトを始動。また、ドゥヴァールは作家への報酬増と美術業界における差別廃止を求める団体「Wages For Wages Against」の一員である。



LIVE THROUGH THAT ?!, 2014

パメラ・ローゼンクランツ

Pamela Rosenkranz

1979年、スイス生まれ

現在はチューリッヒを拠点に活動。

映像、彫刻、インスタレーションなどを扱い、人間の実存と虚構、グローバリゼーションと消費社会の問題を扱うことで知られている。

近年の個展として、2017年プラダ財団（ミラノ）、2015年ヴェネツィア・ビエンナーレ（ヴェネツィア）、2010年ジュネーヴ近現代美術館（ジュネーヴ）、ブラウンシュヴァイク美術館（ブラウンシュヴァイク）などがある。近年参加した主なグループ展として、2017年ルイジアナ美術館（コペンハーゲン）、マイン美術館（ドイツ）、2014年カルマインターナショナル（スイス）、2013年ヴァルト（ベルリン）、2008年のベルリンビエンナーレ、マニフェスタ7（イタリア）など多数。



Skin Pool, 2014
Courtesy of the artist
Photo : Stefan Altenburger

ティノ・セーガル

Tino Sehgal

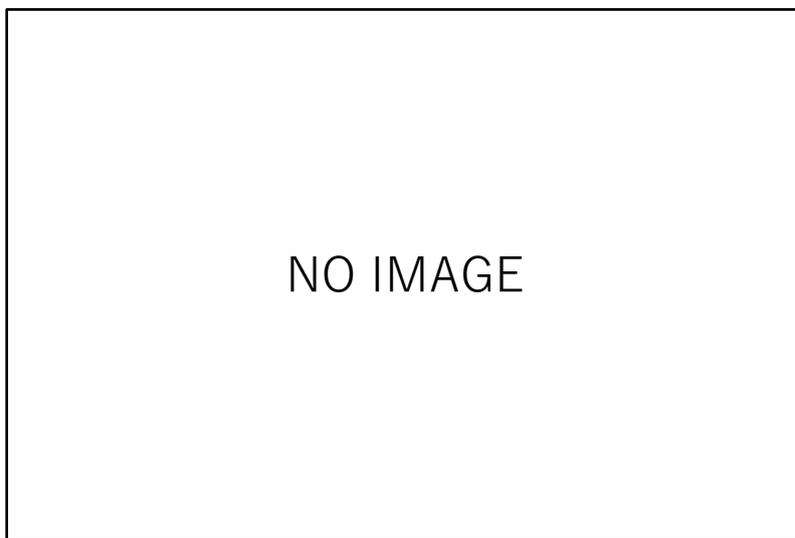
1976年、ロンドン生まれ。

現在はベルリンを拠点に活動。

他人に指示を与え、従来のアートパフォーマンスの領域を踏み越えたパフォーマンス作品を発表している。またそれらのパフォーマンスを一切記録に残さないことで知られている。

2013年にヴェネツィアビエンナーレ金獅子賞を受賞。

近年の個展として、2016年パレ・ド・トーキョー（パリ）、2015年アムステルダム市立美術館、キアスマ美術館（ヘルシンキ）、2012年テート・モダン（ロンドン）、2010年グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）。近年参加した主なグループ展として、2014年ヴェネツィアビエンナーレ/建築（ヴェネツィア）、2013年ヴェネツィアビエンナーレ（ヴェネツィア）、2012年第9回上海ビエンナーレ（シャンハイ）、ドクメンタ13（カッセル）、2010年光州ビエンナーレ（光州）、2007年リヨンビエンナーレ（リヨン）など多数。



Annlee, 2012
Dimensions variable
Ishikawa Foundation, Okayama

ミカ・タジマ

Mika Tajima

1975年ロサンゼルス生まれ。現在はニューヨークにて制作活動中。

現代生活を取り巻くテクノロジーに焦点をあて、ペインティング、立体、映像、インスタレーションなどのメディアを通じて、人間と人工物の関係や、人間が自ら作り出した環境や社会について考察する作品を発表してきた。

2017年度には New York Artadia Award を受賞。近年の主な個展に 2018年「MIKA TAJIMA: ATHER」Borusan Contemporary (イスタンブール)、2017年「After Life」Wadsworth Atheneum Museum of Art (ハートフォード)、2016年「Meridian(Gold)」Sculpture Center (ニューヨーク)、「Emotion Commune」Protocinema (イスタンブール)、「EMBODY」11R (ニューヨーク)、2014年「Total Body Conditioning」Art in General (ニューヨーク) など。近年参加した主なグループ展として、2017年「COLORI」Castello di Rivoli and GAM(トリノ)、「All Watched Over by Machines of Loving Grace」Palais de Tokyo (パリ)、2013年「六本木クロッシング 2013: アウト・オブ・ダウト」森美術館 (東京) など。



“Force Touch (Manu Dextra Sinistra)”. 2017

©Mika Tajima

Courtesy of TARO NASU

Photo : Kei OKANO

3 鑑賞券

次のとおり鑑賞券の価格を設定し、電子鑑賞券販売業者、県内プレイガイド、旅行代理店等を通じ効果的な鑑賞券販売促進を行う。特に、県内の盛り上がりを図るため県内の鑑賞券販売促進を行う。また、会期中は、有料会場や岡山駅前インフォメーションセンターにおいても鑑賞券を販売する。

[鑑賞券の価格]

	前売引換券	鑑賞券
一般		1,800 円
一般（県民）	1,000 円	1,500 円
学生（専門学生・大学生）		1,000 円
シルバー（満65歳以上の方）		1,300 円
団体（8名以上の方）		1,300 円
単館（1会場のみ鑑賞可）		500 円

※前売引換券は、会期中に会場等で鑑賞券に引き換える

※障がい者、介助者1名は無料

※入館当日のみ再入場可能



[鑑賞券の販売時期]

○前売引換券：2019年5月27日（月）～2019年9月26日（木）

○当日鑑賞券：2019年9月27日（金）～2019年11月24日（日）

[前売引換券の販売場所]

岡山芸術交流チケットセンター、公式ウェブサイト、チケットぴあ（Pコード：992-316）、ローソンチケット（Lコード：63154）等で購入可能。

※販売窓口一覧は公式ウェブサイト（<http://www.okayamaartsummit.jp/2019/>）に掲載

4 情報発信

県内・近県・全国・海外に向けて、時期に応じたタイムリーな広報活動を幅広く展開し、本展の周知と来場促進を図る。

- ・5月27日に公式ウェブ（<http://www.okayamaartsummit.jp/2019/>）サイトをリニューアルし、

作家情報をはじめ、本展に向けての各種イベント告知や募集記事等を発信する。

公式ウェブサイト トップページ



- ・新たなデザインのポスター、チラシ、街頭フラッグ等の設置や配布を行う。
- ・地元メディア、美術専門誌、カルチャー誌、旅行誌等、各ターゲットに向けた媒体を通じて、効果的な情報発信を行う。
- ・報道獲得に向け、メディアキャラバンを実施する。

本計画についてのお問い合わせ

岡山芸術交流実行委員会事務局

〒700-0823 岡山市北区丸の内二丁目1-1

TEL: 086-221-0033 | FAX: 086-221-0031 | E-MAIL: info@okayamaartsummit.jp

WEB: www.okayamaartsummit.jp